

1. 当園の教育目標

- 園での生活を通して、のびのと遊ぶ楽しさや人と関わる喜びを充分に経験させることで、子どもたちの心を幸福感で満たし、情緒の安定した偏りの無い人格を形成する。
- 他人に受け入れられ認められる経験を通して、自己肯定感と感謝の気持ちを持てるよう導き、生きる力の基盤となる強い心を育む。
- 感情の行き違いや意見の衝突を経験することで、自分以外の人も自分と同様に大切な存在であることに気付くよう導き、他に対する思いやりや労りの心を育む。

2. 本年度重点的に取り組む目標・計画

新型コロナウイルス感染への不安から、保育活動全般に制限を余儀なくされて2年目となる。感染対策を徹底する一方で、コロナ禍でも子どもたちに学びの機会を保証するためにできることを模索し続ける職員の心身両面での負担は増すばかりである。昨年に引き続き、職員への精神面での見守りや援助が園としての最優先事項と考える。

○ 保育者としてのモチベーションの維持

1) 同僚性を高める

職員間で保育について相談したり、協力し合える良好な関係性を構築、維持することで、ストレスの軽減を図り保育者間の連帯感を高める。同僚として保育者同士が支え合い、意欲的に保育に臨める職場環境の実現を目指す。

2) 達成感を得られるようにする

保育者が自身の保育の成果を実感できる機会が少ないので、保護者に代わって園長や主任が保育内容や子どもたちの様子について評価し、褒めたり労いの言葉を掛けたり、時には共感することで達成感を得られるよう配慮する。

3) 感染への不安の軽減

園内で感染者が確認された場合の対応について、休園・学級閉鎖・自宅待機の期間、自費検査など、職員の不安を軽減できるように慎重を期す。

○ コロナ禍において保護者の理解を得られる保育活動(制限中の展開)を志向する

感染の不安が大きい保護者と、子どもの経験不足や教育の偏りを憂える保護者が混在する中で開園日数・保育時間の確保や行事の実現、保育内容の変更など、理解や納得を得られるように熟考を重ねる。

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

1) 同僚性を高める C

保育内容や行事の際の変更点など学年毎で担任が相談し、協力して取り組む機会は多かった。概ね必要な連携は取れており保育に支障は無かったが、担任の性格や相性によっては意見の食い

違いから信頼関係が揺らぐこともあり、同僚との関係性がストレスの一因となったことは残念である。

2) 保育者の達成感を重視する B

園長や主任は保育内容や日々の子どもの様子を注意深く観察し、保育者に対して日々の取り組みを認め、評価したり労いの言葉を掛けるよう心掛けた。保護者からの感謝や好意的な言葉を受けることが稀な現況にあって、保育者の努力が報われ達成感を得る上で一定の効果があった。

3) 職員の感染への不安を軽減する A

園内で感染者(コロナウィルス陽性者)が確認された際には、対子ども、対同僚の両面で、職員の感染への不安を軽減できるように、自宅待機の期間を十分に確保し、自費検査の取り次ぎや検査キットの提供を行った。

4) コロナ禍での保育上の工夫 B

感染拡大防止のため、臨時休園や学級閉鎖、短縮保育の延長など、実際に保育時間が削られたことによる活動内容への制限を余儀なくされる中、行事や日々の保育について可能な限り活動の幅を拡げて、水遊びや珍しい素材を使った制作、運動会でのカラーガードへの挑戦など、多様な経験の場を設定し実行することができた。

5) コロナ禍での保護者への配慮 B

突然の臨時休園や学級閉鎖、保育時間の短縮など、その都度迅速で丁寧な状況説明に努めてはいたが、保護者を困惑させる状況が相次いだ。子どもの園での様子について情報を共有し、保護者の理解を得るために動画配信だけでなく、人数を分けての保育参観や入れ替え制での行事の観覧など、保護者が直接参加できる機会の確保に努めた。

4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果 B

コロナ禍での保育が2年目となる今年は、実際に感染者が多数確認され、園内で感染への警戒態勢を緩めることができない状況にありながら、一方で行動制限や自粛から解放を志向する人が増え、園行事に対する保護者の期待の高まりを受け止めなければならなかった。概ね皆が安心し、納得できる教育活動を模索し続ける1年となった。

具体的には保育参観を3回に分けて実施したり、感染対策として自宅待機を強られる園児に配慮して、発表会の日程を複数回設ける等の工夫を試み、園行事の活性化を図った。しかし、園行事の内容やマスクの着用等、園運営上のあらゆる事柄の是非について、保護者からの意見・要望が寄せられることが多く、全保護者の理解、賛同を得ることの難しさを痛感した。感染の不安を抱えながら日々の保育で実現できることを考え、子どもだけでなく保護者にも喜び感動を共有してもらえよう努力、善処したつもりではあるが、昨年から保護者の来園機会を制限し続けたことで、園の教育活動に対する保護者理解が深まらず、相互の信頼関係が十分に築けていないと認識せざるを得ず、努力が報われない残念な思いが残った。

そんな中でも日々子どもと接する保育者には、安定した情緒のもと、明るく前向きな姿勢を保持できるよう環境を整えることが、園としての責務である。保育者が意欲的に日々の保育に臨め

るよう、園長はその精神面への気配り、援助に注力した。些細なことでも職員間の人間関係のトラブルは、当事者にとってストレスの原因となるので、身近で注意深く見守り深刻化する前に双方が納得できるよう事態の收拾を図った。今後も学年主任ミーティングや主任、キンダーカウンセラーとも連携して状況を把握し、引き続き良好な職場環境を維持できるよう努める。

5. 今後の取り組むべき課題

- 園児の確保
少子化の時代における園児確保のために、未就園児クラス拡充を図る。
- 優秀な人材の確保
職員定着に向けて、個人の希望を反映した人員配置を実現する。
特別支援対応、預かり保育対応、病児対応など、更なる職員の補充を図る。
- 同僚性の向上
協力的な指導体制を確立するために、職員のキャリア、性格、相性も加味して、適切な人員配置を行い、円滑なコミュニケーションにより、同僚性の向上を図る。
- 保護者との信頼関係の強化
保護者が園に対して親近感や信頼感が持てるように、保育者や子どもと共感できる機会を増やす。

6. 学校関係者の評価

- 令和3年度の自己評価の内容、全項目にわたって特に指摘すべき事項はなく、妥当であると認められる。
- 重点的に取り組む目標や計画、評価項目について
コロナ禍の社会情勢をふまえて適切に設定されており、園の取り組み内容がよくわかる。
- 今後の課題、改善に向けた方策について
少子化問題、保育士不足など社会情勢を反映させた今後の園運営のための課題が明確に記されている。
方向性は明示されているが、方策の詳細については今後検討していくということか。
- その他
コロナウィルス感染拡大防止の観点から、保育参観を始め学校関係者が実際に来園し、園の教育活動について理解を深める機会が依然制限されたことは残念であった。

感染予防の観点で仕方ないと思うが、預かり保育の受入人数制限により、新1号認定児の保護者にとっては利用し辛い状況が続いた。保護者に配慮し、柔軟に対応して欲しい。